



「できた！」

No. 18

文責 校長 木下和敏

言葉を大切に～感謝の気持ちで「いただきます」～

11月1日（火）、通常通り子どもたち全員を体育館に集合させて全校集会を行いました。コロナ対策に関しては、決して気を緩めることができない状況は続きますが、「できる時に、できる事を、できる工夫をして」行いたいと考えています。体育館に集まった子どもたちは、整然としており、集会に臨む姿勢がよくできていました。高学年の子どもたちが良い手本を示し、低学年の子どもたちも高学年の姿に学ぶことができてきたと感じています。

学校生活の中では様々なトラブルが起こります。その一つが言葉のトラブルです。子どもたちが深い意味もなく使っている言葉が、時として相手の心を傷つける言葉となるときがあります。例えば、「うざい」「むかつく」などの言葉です。「うざい」は、細々としたものを邪魔に感じるという意味がある「うざったい」を短くした言葉で、言い換えると「うんざり」「げんなり」「鬱陶しい」「わずらわしい」などの言葉になるそうです。【参考：語彙力図鑑（齋藤 孝・著）】



【11月全校集会：校長講話（一部抜粋）】

みなさんは食事をする前に両手を合わせて言う言葉がありますね。何と言いますか。そうですね。みなさんが言った「いただきます。」というのは感謝を表す言葉です。では、何に感謝をしているのでしょうか。

食事を作ってくれた人への感謝の言葉ですね。学校で言えば、給食センターに努めている調理員さんや栄養士の先生ですね。また、食事のもとを作ってくれている人への感謝の言葉でもありますね。お米や野菜、果物などを作ってくれる人、魚や貝をとったり、豚や牛、鶏を育てたりしてくれる人など、まだまだ、数えきれないほどの多くの人の努力で私たちの食事は作られています。感謝の気持ちをたくさん持って「いただきます」をしなければなりませんね。

じつはもう一つの「いただきます」があります。ここに一冊の本があります。宮沢賢治さんの「よだかの星」という本です。簡単にお話を紹介します。

よだかは昆虫を食べる鳥です。ほかの鳥から醜いと馬鹿にされていました。ある日、鷹から無理なことを言われ、そうしないと殺すと脅されます。仕方なく空を飛びまわっている内に、一匹のカブトムシを飲み込みます。そのとき、こう考えます。「ああ、カブトムシやたくさんの羽虫が、毎晩ぼくに殺される。そしてそのただ一つのぼくが、今度は鷹に殺される。それがこんなに辛いのだ。」

よだかは自分が生きるために昆虫を食べます。昆虫の命をもらうことで自分の命が続いていきます。命をもらわないと生きていけない、それが辛いとよだかは言うのです。

食べるということは、他の生き物の命をもらうことです。動物も私たち人間も、他の生き物の命をもらって食べて、それで生きています。魚を食べる、お肉を食べる、卵を食べる、野菜を食べる、みんな命をいただくということです。これは、命がつながる世の中の仕組みでもあります。「よだかの星」のお話はこういうことを考えさせてくれるお話です。

「いただきます」は、私たちの命をつなぐ食事のために「命をいただきます。ありがとうございます。」という感謝の気持ちの表現でもあります。だから「いただきます」ときに手を合わせ、拝む姿勢をするのはとても自然なことなのです。命をいただいていることを忘れず、感謝して食べましょう。